
N.N.N.

セカンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N・N・N・

【Nコード】

N0480J

【作者名】

セカンド

【あらすじ】

滅亡へと向かう世界。そんな世界にある一人の天才が示した答え、リアルオンライン計画。その計画はオンラインゲーム「トウエンティ」と世界を融合させることによってこの危機を回避するということだった。これはそんなオンラインゲームの世界で何かを亡くして戦う少女が織り成す物語である……かもしれない

P K K 絶望の深淵 (前書き)

この物語はフィクションです
実在する人物・団体等とは一切関係がないです
はい

P K K 絶望の深淵

赤黒い砂漠の真ん中で黒衣にこの世界では珍しい白髪の人Cは複数のP Cの集団 一般的に言われているP Kに囲まれていた。

黒衣に白髪、彫刻のような無表情の顔はどこか中性的で10代と言われても30代だと言われても判断がつかない、だが憎しみと憎悪に満ちた瞳だけは、ただの彫刻とは一線を画するものがあつた。

黒衣の人Cはざっと七人のp kに囲まれているというのに微動だにしない。

その様子は油断しているように見えるが内心では相手の動向を逐一観察しどこからスキルもしくはスペルが飛んできてもしっかりに準備をしていた。

「なあお前その白髪に黒衣もしかしくなくても『絶望の深淵』さんだよなあ？」とp kの中から出てきた長身に赤髪のリーダー格らしき女性p cが妙に艶かしい声で問いかけた。

この世界、トウエンティエンスは元々の世界とネットゲーム『トウエンティ』をデータ配合し構築された 半ゲームデータの世界である。

元々の世界・・・地球は人口の爆発的增加による食糧危機、大量破壊兵器の開発によって生み出された第四次世界大戦、それに伴う環境破壊等の世界的危機により滅亡の危機に瀕していた。

そこに一人の天才科学者テレスが活気的な計画を打ち立てた。

それが「リアルオンライン」計画である。

この計画はオンラインゲームとこの地球をデータ化して融合し全ての問題を解決するというある意味突拍子もない計画であったが、この惨状の中、藁にも縋り付きたい人類はその提案に乗るしかなかったのだった。

『絶望の深淵』と呼ばれた黒衣に白髪 of 男は口元に隠しきれない笑みを浮かべていた。それはまるでこれから始まるパーティ of 主演は自分であるかのように彩るものだった。

「群れて雑魚 p c を狩るしか能のないてめえみたいなゴミ屑どもは俺が綺麗に過激に最高に掃除してやんなきゃいけねえよなあ」

その言葉に黒衣 of p c を取り囲んでいた p k 達 that 殺気立つ「いってくれるじゃねーか、絶望さんよおお前がどんなに強くてもこの人数で勝てると思っ of てんのかよっ」不意にそれまで徒手空拳だったリーダー格 of 女の手に禍々しいフォルム of 長剣が現れそれが横薙ぎに払われた。

黒衣 of 白髪 of p k k 『ナクス』はその鋭く汚く醜い一撃をバックステップでかわすと自分の獲物を虚空から取り出した。

それは先ほど p k の女が取り出した長剣より更に禍々しく毒々しく怜悯な二対 of 短剣、ナクスはそれを交差させリーダー格 of 女の女が長剣を振り切った隙を見逃さずスキル『クロスディバイン』を叩き込んだ。

ナクスはその速度に目を剥いて驚いている敵 of 気配を感じて喜悦 of

笑みをこぼした。

クロスディバインは双短剣低位のカウンタースキルだ、動作はシンプルで相手の刃をかわし交差させた短剣をそのままクロスし相手を切り裂くだけだ。

しかし「絶望の深淵」ナクスのカウンタースキルの出は異常に速い、これはナクスが敏捷ステータスをかなり上げていることを意味している。

胸元を切り裂かれた女はさすがにリーダー格というだけあってカウンタースキルに一撃で倒れることはない、しかし相応のダメージを負っているようで素早く後ろに後退した。

「お前らっ何してるさっさといっつをぶちのめせっ」
リーダー格の女の言葉にやっと驚きか恐怖かそれに近い感情から解放されたpkが動きを見せた。

P K K 絶望の深淵 (後書き)

これからがんばって更新していこうと思いますので良いところ悪い所とご指摘頂ければ幸いです。

オンラインゲーム楽しいよオンラインゲーム

オンラインゲームでも一言あればよろしくです はい

ナクスの場合

この世界トゥエンティエンスは4つの国に分かれている。

科学が発達した機械国イーグリアス。

魔法がこの世界で至上の力とする魔国ガンダリア。

普通の人間よりも身体能力が発達している極国レイハード。

そして、その三国の中央に位置する学園国家オールツール。

これは元々オンラインゲーム「トゥエンティ」にあった架空の国だったが、世界がトゥエンティと融合した時点でこの国は架空のものでは無くなり実在する国家として機能するようになった。

オンラインゲーム「トゥエンティ」にレベルアップというモノは存在しない。

このゲームは経験地というモノの代わりにSPというポイントをゲットすることができる。このSPを使って自身のステータスを上げていくのだ。

この設定はこの半ゲーム世界にもそのまま適用されている。

ステータス以外にspはスキルにも振ることが出来るようになっていてより高位のスキルを使うにはスキルのステータスアップをしなければいけない。

という、この世界で生きるものにとっては当たり前の授業内容をただ淡々と述べる教師にナクスは辟易していた。

このオールツール中央国立学校にナクスはいた。

入学してから一ヶ月が経つが今のところナクスが興味をそそられたのは実技の授業と魔科学に機械学という有様。

しかもそれもずっと昔から知っていることのおさらいのようなものだ。

こんな所に俺はなんでいるんだろうか・・・

「ナクス君、お昼ご一緒しませんか？」ナクスが感慨に耽っているとすぐ傍に

いた同じクラスのルイフェランス・トラインが誘ってきた。

人を引き寄せるような藍色の瞳 彫りが深く整った顔立ち 清潔そうな長く黒い髪、脚はほっそりとしていて長く出るところも出ていてスタイル抜群だ。

一言で言うならそう美少女である。

入学式から一ヶ月もたったところにいきなり転校してきたいかにも訳ありというナクスに積極的に話しかけてくる数少ない世話焼きの一人だ。

ちなみにナクスにあんまり人が近寄らないのは目つきが果てしなく悪いという理由もある。

「別にいいけど、ルイフェランスさんは弁当組みじゃなかったかな？」確かルイフェランスはいつも手作りの弁当を持ってきたはずだ。

「実は・・・お弁当を少々多めに作ってしまいまして、私一人じゃ食べ切れそうもないので」なるほど、それで俺にお呼びがかかったと言うわけか。やけに大きい弁当箱を持ってきていたのにもそれで納得できる。

「でも、それなら他に人がいるじゃ・・・」いるじゃないかと言いかけたところでナクスは口をつぐんだ。なにせ目の前のルイフェランスのつぶらな瞳が潤んでいるのだ漢字の漢と書いて男と呼ばれる者になるならばここは決して断ってはいけなところだと嫌でもわかる、それに周りからの鋭い視線が痛い。

「わかった、それならご一緒させて頂きます」

「よろしい」

ルイフェランスの満面の笑顔にナクスは不覚にも見とれてしまった。

「ルイフェランスさんは確かガンダリア十貴族の内の第三位のトライン家の次女だったよね？」こっちの方向ということは中庭で食べるのかな？と思いつながらナクスは何気なくたずねた。

普通ならガンダリアの貴族はガンダリア魔法育成学校に行くはずなのだがルイフェランスは多くの他国の人間と接する機会が必要だとうことでオールツール中央国立学校にきているらしい。

「はい、といっても貴族なんて、そんなに大層なものじゃないですよ」

ルイフェランスの持ってきた弁当は確かに量が半端ではない程多かった。やけに多い？そんな可愛らしいもんじゃなかった。

なんせ普通の弁当箱が五段も重ねられているというスペシャルっぷり。

ナクスは最初に見たとき驚きで数秒ライフエランスの顔をまじまじと見つめてしまったくらいだった。

これで少々って普段からどんだけ食べているのだろうか・・・

よくこれだけ食べてもそのスタイルを維持できるものだ。

半ゲームデータ化したとは言え基本的なことは元々の世界とそこまです変わってはいない。食べ過ぎれば太るし運動しなければ体は少しずつ衰える。そういう設定になっているのだ。

「そんなことはないんじゃないかな、先の三国大戦の時も大活躍だったって聞いてたけど」トリデイン防壁での防衛戦での事は俺も耳にしていた。

「確かにお父様達は先の戦で英雄と持て囃されましたが、戦争などで活躍しても

そんなの意味ないです。」

少し暗い顔で答えるライフエランス。

あまり触れないほうがいい話題だったようだ。

「ナクスさんはオールトールの郊外で一人暮らしをしていらっしやるんでしたっけ」

「うん、親父も母親もあの大戦で先に逝っちゃったからね」

なんでもないような口調で語るナクスだが、それは嘘だからだ。

本当はもつと他に色々事情があるのだがこれがばれたらスパイ罪、身分偽証罪などその他諸々の罪で一生表にはでられなくなるだろう。

「すいません、嫌な事を思いださせてしまいましたね」

「いや、いいんだもう自分の中でとっくに整理をつけたことだからね」

申しわけなさそうにするルイフェランスを見て、ナクスは罪悪感が心の内を駆け巡るのを感じた。

「そんなことより、こんなにおいしい弁当を食べたのは初めてだよ俺はいつも家では自炊してるからそこそのものは作れると自負してたけどルイフェランスさんは数段レベルが高いね」

「そ、そうでしょうか？ お料理は私も大好きなので、そう言って貰えると嬉しいです」

これはお世辞でもなんでもない本当にルイフェランスの弁当は自分が作る料理よりも格段においしかったのだ。

ルイフェランスはさっきまでの暗い顔が嘘だったかのように満面の笑顔を浮かべている。

「やっぱりルイフェランスさんは笑顔のほうがいいよ」ナクスは思ったことをそのまま口にした。

その言葉にぼふっと顔が真っ赤になるルイフェランス。

それを見て今日も平和だなあと本来の目的も忘れてのほほんとして

いると校舎からもの凄い砂煙をあげてこっちへ向かってくる何かをナクスは視界の端で捉えた。

やれやれ、どうやら厄介ごとの種がおでましのようだ。

俺は軽い頭痛を覚えながら砂煙を上げている紅と蒼から飛んでくるだろう攻撃に備えた。

「紅龍円舞掌 おおおお おおおお おおお」 「龍蒼」

まるで正反対の掛け声と共にロケットのように突き出された掌を左手で受け止め、もう一方の薙刀は受け止めた掌を軸に空中で回転し避ける。

「なんで避けるのよ!!」 「臆病者」

言いたい放題いってくれる、だいたい薙刀は避けたがお前のパンチは受け止めただろうが。

「受け止めたのなんて偶然よ!!」 「それは必然」

「なんですって蒼龍!？」 「ほんとの事を言っただけ」

「あんたの龍蒼だって避けられたじゃないの!」 「それこそ偶然」

完全に俺は置いてけぼりだ。被害者こっちなのに・・・。

「あー分かった分かったお前ら姉妹喧嘩はやめろっての見苦しいぞ」
全くいい迷惑であるこちらルイフェランスとののんびりとした昼

の一時を満喫していたところなんだぞ。

その言葉に二人は「ふざけんな！このモノクロド変態野郎」「一遍死ね」と同時に反応を返してきた。

全く仲いいお前ら。

というかモノクロは否定しないがド変態ってなんだド変態っていつから俺はそんな不名誉なレッテルを貼られてしまったんだ。いくら白髪に制服がんな無視の黒衣を身にまとっているからといってモノクロと見なされるのも些か心外だが。

なんて半ば現実逃避をしかけていた俺だが、いつまでもこの凶暴な姉妹を前にじっとしているのは命取りだということぐらいは理解している。

なにせ、気性が荒いので有名なレイハードの極人だ。その中でも飛びぬけて武術に優れていると言われている。

あの四神一族の姉妹。四神紅陽「しがみこうよう」と四神蒼双「しがみそうそう」は今年の入学テストでレイハード部門の試験を同率トップでパスしてきたという話は有名だ。

オールツール学園に入学できるのは15歳からなので、この二人も15歳なのだろう。

二人は姉妹だからなのか分からないが顔がそっくりで、二人とも十代とは思えないことなく鋭い印象があるが四神紅陽は燃えるような紅い髪を二つに結んでいて四神蒼双は綺麗な青い髪を短く切りそろえており、遠目からでもどっちがどっちなのかよくわかる、レイハード人だからなのかオールツール学園一年の地味な灰色の制服越

しからでも分かるほど脚も手も長く理想的なバランスを誇っている、ただ胸は残念なことになっている。本当に残念なことだ。

ちなみに俺は試験自体をパスしている。なにせ裏口入学ですから。札束でちよつと頬を叩いてやれば一発なんだよハッハッハ。いや、もちろんそんなことはしていない。

「それで？ お前らなんか用があつてきたんじゃないのか？」

こいつらの暴力など挨拶みたいなものだということは俺も一ヶ月で分かり始めていた。

だからといっても迷惑なことなんだが。

「あんた、あの噂を聞いた事ないかしら」と暴力姉。

「噂？」

ナクスの場合（後書き）

なんか時間が空いて気づいたら書き方が変わってました・・・
これからはこんな感じになると思います

ナクスの場合2

「そう、近くでP Kが現れた」と暴力妹。

「P Kか」 俺は自分の声が冷たくなるのを感じた。

「P Kですか!？」不意に隣で静かに見守っていたルイフェランスが声を荒げた。

「モンスターとの戦闘では、人は死なないけどP Kは別だ……」

珍しく静かに呟いた暴力姉だが、その目に憎悪と殺気が滾っているのを俺は見逃さなかった。

そう確かにP Kなら人を殺すことができる、モンスターとの戦闘は元々ゲームだった頃から存在していたものだがP K要素は無かったものだ。P Kはこの世界がトゥエンティエンスになってから生まれた新要素。故に国家間の戦争などの戦闘で負けた際に発動する強制ワープ機能が作動しない。

「でも、それを倒した奴がいるらしいのよ」さっきとは逆に顔が活き活きとし始めた紅陽。

「絶望の深淵」妹の方も表情は読めないが活き活き?としているように見える。

「あのP K Kの絶望の深淵ですか？」ルイフェランスだけは不安そうにしている。よかった。お前はまだ常識人で助かった。この手の話題で盛り上がる奴らなんてまともな神経をしているはずがないの

だ。

「お前らなあP K Kの追っかけなんていい加減やめろって命がいくつあってもたりねーぞ」

P K KとはP Kを狩る者。つまるところ根は同じP Kなのだ。P K KがP Kをしないと誰が言い切れるだろうか。

それに同胞を殺されたP KがP K Kを狙っているという話はよくある話だ。

「何びびってんのよ！P Kを狩るP K Kの中でも上位ランカーの絶望の深淵よ！？めっちゃくちや戦ってみたいじゃない！！」

「右に同じ」

なんでこいつらは当然でしょって顔でこっちを見てくるんだろうか。やめてくれ俺まで戦闘狂だと思われるじゃないか。

ほらルイフェランスさんも哑然とした顔でお前らを見つめてるじゃないか。馬鹿なの？死ぬの？って顔してるぞ。

それに、紅陽は根本的な勘違いをしている。

絶望の深淵というのは、称号名のことであり、それは常に一定の人物を表しているわけではない。

絶望の深淵の称号を手に入れる条件は、絶望の深淵であった者をP Kすること……つまり殺すことだ。

今の絶望の深淵である俺は、P K Kではあるが、その前の絶望の深淵はP Kだった。

「なんでわかんないかなあこの気持ちだが、まあどうせチキンでびりで臆病なあんたにはわからないかもねえ」
紅陽の挑発的な目が俺を見つめるがそんな手には乗らない。

そんなもんわかんなくてもいいし、チキンもびりも臆病者も意味が被ってるだろ。と思ったがまた暴れだしそうなので黙った。

しかし、そんなことより今は絶望の深淵が現れたという情報に興味があった。

絶望の深淵がこのタイミングで現れるはずがないのだ。

なにせ、この俺がそのP K Kなのだ。

つまり俺じゃない何者かがP Kを倒し絶望の深淵であるP K Kを釣るために絶望の深淵の名を騙っている可能性が高い。

俺は明らかにこの周辺に現れたP Kを倒した人物に挑発されているわけだ。

これは、罠かもしれないが俺としてはP Kの情報を得られそうな機会に逃したくはない。

そうヤツをあの世にぶちこむまで・・・

そうとすれば、この脳筋姉妹に付き合ってるのもやぶさかではないな。

ナクスの場合3

「そこまで言うのなら絶望の深淵を探しにいかないか？」

俺のこの一言に皆が哑然としているのが、気配で察しなくても顔を見ればわかった。

まあそれも当然かもしれない。なにせさっきまでと言っていた事が180度違うわけだし。

「あんた・・・いつもやる気がなさそうで授業もまともに受けてなくてぐうたらなあんたが・・・」と紅陽。

「どうしちゃったんですか！！ナクスさん！？頭にウジでも沸いちやったんですか！？」とルイフェランス。

「？（‘◇’＊）エエッ！？」と蒼双。

これはひどい・・・。ここまで言われるとは心外だ。俺はいつもそんなに駄目駄目な風に見られていたのか。

「そこまで言う事無いだろ、俺は今かなり傷ついたぞ」

「だって・・・あんまりにも意外だったから・・・」と言うルイフェランスさんの言葉に頷く姉妹。

確かに、俺は普段からこの学園でやる気があるところを微塵も出してない。

この一ヶ月間 俺は授業の時間ほとんどを睡眠に当てていた。

実技のテストは全くといっていいほど力を出していなし筆記テストもほとんど睡眠時間に行っている。

成績はもちろん下の下だ。

というかはつきりいつて最下位だった。

そういわれてみると俺は、ぐうたらなのか？

考え直すまでもなかった。

「ふむ、これは少し生活習慣を改善しなければならないようだな。」

今更気づいたのかと呆れ顔で見つめる三人。そんな目で俺を見るなああああああああああ。

「正直言って悪いんだけど、足でまといよ」と辛辣な言葉を投げかけてきたのは紅陽。

「PKやPKK相手に守りきれぬ自身はない」とその妹。

どうすればいいのだろうか。ほんと俺が絶望の深淵です。なんていったらどうなるか想像したくもない。

かといってこのままだと俺は何もできないただのお荷物と見なされ置いてかれてしまう。

ここは少し反撃してみることにしよう。

「そこまで言うんだったらお前らもPKやPKKと戦えるほど実力があるのか」

はつきり言っつていつものパンチや薙刀による挨拶程度の攻撃ではこいつらがどれ程の使い手なのか計りきれていない。この姉妹の本当の実力を俺は知らない。ここらで少し確かめておくのも悪くないだろう。

四神の力というやつを。

「あら私達の実力を疑うっていうの？いい度胸ね」

自信満々だなあおいつ。

「それだったら、私と姉さんで模擬戦をやる」

「ナイスアイディアよ、蒼双それでいこうっ」

「それで実力がわかるものなんですか？」とルイフェランス。

模擬戦は実力を計るにちょうどいい。スキルの熟練度。ステータスの高さ。プレイヤースキル等等一気に確認することができる。という説明にルイフェランスは納得してくれたようだ。

「それじゃあ、闘技訓練場までいくとするか」俺の声は四神姉妹の闘舞が見られるということで柄にも無く弾んでいた。

ナクスの場合3（後書き）

最近オンラインゲームができない環境になって少しつらいです・・・
でも受験生も間近だしねっ勉強しないとだよねっ
でも小説書いてるってあれ・・・？

ルイフェランスの場合

ガンダリアから離れてオールツールものの学園に入学してから一ヶ月が経った。

最初は他の国家の人間が怖くてなかなか近づけなかったが、オールツールに来了目的を果たすためにはこんなんじゃ駄目だと思い頑張っ
って皆とも積極的に話しかけるようにした。

そのおかげか、私はいつも一緒にいる友人はまだできていないが、ほとんどのクラスメートから親しく話しかけられるくらいには仲良くなっていた。

成績もガンダリア貴族らしくあれという父の教えの通りに一桁の順位を維持している。

そんな、代わり映えのしない一日が今日も始まったと感じていたら彼が現れた。

転校生の彼は教室に入ってきた時から何かが違うような気がした。

体中に悪寒がゾクゾクと駆け巡った。

そして・・・彼がこっちを向いて自己紹介を始めた時・・・

その目が・・・魚が腐ったような瞳が私達を見ていた。

暗く濁り何もうつしていない瞳。

叫びだしたいのを堪えて私はじっとその瞳を見つめ返した。

なんで……こんな……化け物がこんなところにいるの……。

猛獸の檻に閉じ込められた時に感じる恐怖ですら、今の彼から発せられる瘴氣に比べればかわいいもののように感じられた。

もう駄目。もう私達はここで死ぬんだわ。駄目だめだめだめだめ駄目駄目駄目駄目駄目駄目だめだめだめだめ。

しかし、何事も起こらずに彼は自己紹介を始めた。さっきまでの瘴気は無くなり急速に現実に取り戻れたような感覚。

彼のさっきまでの威圧感は嘘のようにだらだらとした感じでデータボード（パソコンの画面が立体化したもの）に名前を記入していた。

入力は一瞬で終わった。彼の名前はナクス。その名前は私の心に深く刻み込まれた。

それが彼との出会いだった。

どうして彼があんな空気を纏っていたのか。私は未だに尋ねる事ができない。

それから私は彼に積極的に話かけるようになった。

私はあれから彼のことが気になりずっと目で追っていた、四六時中彼のことが気にかかり授業にもなかなか身が入らない。

彼の目。あの時の怖いくらい何もうつしていない瞳。どうして……

あんな瞳ができるのか。

でも今の彼からは微塵もあんな空気を感じられない。むしろ彼はあんなものからほど遠い暖かい人間だと私は感じていた。

いつも、だらだらしていてやる気がなさそうでぐうたらしていて。

どうしてだろう・・・

彼はどうしてここに居るのだろうか。

ルイフェランスの場合（後書き）

これだけ書くのにめちゃくちゃ時間がかかりました・・・

ナクスは書きやすいのにルイフェランスはほんとに書き難かった・・・

・

紅陽視点は書いたほうがいいのか？

おいおい考えていくことにします。

ナクスの場合4

さて闘技訓練場についた俺達だが、ここで一つ新設設計のタグがついたこの俺が闘技訓練場について説明せねばなるまい

あれだ・・・実技の授業や実技のテストや闘技祭などで使用される小規模なコロッセオみたいなものだ。

闘技祭というのはこの学園で行われる年に一度ある、戦女神バルドットレットを崇めて開かれるらしい祭りのことらしい。

まあ詳しい事はまだ一ヶ月しかこの学園にいる俺が知るわけがないので割愛する。

四神紅陽と四神蒼双は慣れたものなのか、さっさと自分の武器を取り出して闘技訓練場のちょうど真ん中で対峙した。

「おーい、お前ら装備は大丈夫なのか？」

「大丈夫だって私達いつでも襲われていいように常時戦闘用装備なんだから」

姉の言葉にこくこくと頷く蒼双。

「あ、はい」

なんて物騒な奴らだ。いつでも襲われていいようにって、レイハーの人間ってそんなんばっかだったっかな・・・。

「それじゃあ私がカウントしますね」

「そんじゃあお願いするわ」

四神紅陽の武器は一对の短剣。
どちらも業物だな。

昔レイハードに用があつて滞在していた時に似たような剣を見た事がある。

対する四神蒼双は薙刀を構えている。薙刀については詳しくないが、一目見ればこれも業物だと分かる。

さすがレイハードの名門だな、一般人には手の届かないようないもん使つてやがる。

とか考えているといつの間にかライフエランスがカウントを始めていた。

3・・・2・・・1・・・0が言い終わった瞬間二人は同時に動いた。

紅陽の予備動作無しの刺突が躊躇無く蒼双の心臓目掛けて一直線に飛んでいく。

それを蒼双は左の手の甲ではじき右手でもった薙刀で横薙ぎに払う。

紅陽は蒼双が振るつた薙刀の刃の上に乗り空中に飛び上がりレイハード特有スキル中斬波を放った。

高速の刃が蒼双の頬をかすり小さいかすり傷が出来た。

そのまま紅陽は中斬波の反動で後ろに飛び蒼双と距離を取ろうとしたが、蒼双はそれをさせまいと縮地法を使って一瞬で間合いを詰める。

そして薙刀による鋭い突きが放たれた。

それを短剣二本でガードする紅陽。

この間約一秒。

俺は心の中で素直に賞賛した。今の一瞬であれほどの動きを見せるとは、想像以上だ。

あの姉妹が二人で戦えばナンバーズや七つの大罪とも互角に戦えるのではないかとさえ思った。

「おーいお前らが強いのはよくわかった、だからもう終わってもいいぞ」

「うっさい黙ってろ！」

「ちょっと黙ってて」

はいはいそうですか。仕方ないヒートアップした脳筋姉妹は決着がつくまではならないようだ。

「これはこれはナクスさんじゃありませんこと」

俺が呆れながらも美しいその闘舞を眺めていると、後ろから今一番

聞きたくない奴の声が聞こえた。

俺が無視して闘舞を見ていると俺の後頭部に何か硬い物が押し当てられた。

「てめえ会長に話かけてもらってんのがわかっててシカトこいてんのかこら」

この口が悪い不良少女はアサギだ。オールツール学園の風紀委員長で風紀を守るためと言って普通の制服とは違う戦闘服のようなものに身を包んでいる、一本に結んだ緑っぱい髪と整った顔立ちに野生動物のようなしなやかな身体は男受けがしそうだが、それも黙っていればの話だ。

一度口を開けばそこから出てくるのは罵詈雑言の嵐。どうしてこいつが風紀委員長なんてやってるのか理解できない。

まったくまたうつとうしい奴のお出ました。どうしてこう次から次へと厄介ごとが舞い込んでくるんだ。

「ああ、ああこれはこれは麗しきオールツール生徒会長様ではありませんかご機嫌麗しゅう」

俺は後頭部に当てられた黒光りする銃をどけて風紀委員長を華麗にスルーして生徒会長に挨拶した。

オールツール生徒会長 ソフィア・クロス
容姿端麗 眉目秀丽 成績優秀 実技万能 つまるところ完璧超人だ。

その長く美しいカールした金髪と神が自ら造ったような顔は正に完璧とも言える。

この生徒会長は、その美貌と腹黒い裏工作をしながらも正々堂々と会長選挙を勝ち抜いたと言われているが、ナクスは一年でソフィアは二年なので真実かどうかは分からないが、こいつならそれくらいやりそうだと思っている。

そして忘れてはいけない、ソフィア・クロスには男の夢が詰まったたわわな果実が二つも実っているのだ。

そしてこれはこの学園一の豊満さである。

今まで何人の男がその禁断の果実に騙されてきたことか……。数えるだけ無駄だな。

「ああ私、感涙で前が見えませんわ、初めてあのナクスさんにこんな挨拶をされて私・・・私」

「はいはいわかりましたから帰ってください」

「てめえ会長に向かってその口の聞き方・・・」

「今日は何をしに来たんですか、生徒会役員の話ならもう断ったはずですが。」風紀委員長？そんなのいなかった。

「そのことですが、実はナクスさんにお話がありますの」とさつきとは打って変わって腹黒そうな笑みを見せるソフィア。

こいつがこんな顔をする時は嫌な予感しかしない。

自分が欲しがっていたオモチャがやっと手に入るって顔だ。

「お時間がありましたら生徒会室までお越しいただきたいのですが」

「いえ、今はちょっと」

と言って闘技訓練場内で今も闘っている二人を指差す。

それだけで会長は分かったのか、ふむと少し考える動作をすると俺を睨み付けている風紀委員長アサギに何か指示を出した。

何が起こるのかと少し油断したのがアダになった。

アサギは何の予備動作も無しにロケットランチャーを取り出し闘技訓練場で闘っている二人に向けてぶっぱなしたのた。

クルップ式無反動砲 口径40mm 装弾数一発 全長950mm
旧世界時代のイラク戦争やベトナム戦争で使われたRPG-7だ。

さすがの俺もこれには対処が遅れた。

急いで二人に向かって飛んでいく固体ロケットに減速魔法・威力低下魔法・反射装甲を使ったが、それでも直撃すれば二人は木っ端微塵になってしまうだろう。

俺が魔法を掛け終わったのと同時にロケット弾は二人のいたはずの場所に着弾した。

「紅陽!!! 蒼双!!!」俺の叫び声は闘技訓練場に虚しく響いた。

しかし、着弾地点からは予想していた爆発音が聞こえなかった。代

わりに色鮮やかな煙が噴出、俺の視界を覆っていた。
どうやら、成形炸薬弾ではなくただの煙幕弾だったようだ。

「ソフィア!!」

さすがにこれはおふざけがすぎる。俺は元々そんなに気が短いほうじゃないんだ。こんな事をされて黙っていられるわけがない。

しかし、対するソフィアはどこ吹く風だ。

「あら、私は速やかかつ確実にナクスさんとゆったりと語らう機会を設けるために一番効率的な方法を実行したまですわ。そんなことよりソフィア!! だなんて私呼び捨てにされてしまって不覚にもドキドキしてしまいましたわ。」

何故か頬を染めて恥らう生徒会長。

こいつに何を言っても通じないようだ・・・。

ナクスの場合4（後書き）

なかなか小説を書いていくのって難しいですねえ。

本を読むのは好きですが書くのはこれまた難しい。

ネタは色々浮かんでくるけどそこに到るまでの過程がうーん。

ちなみに今までやったオンラインゲームは テイルズウィーバー

ファンタジーアースゼロ AVA アラド戦記

PS2で今まで一番だと思ったゲーム ・hack/GU

やっぱハセヲいいよハセヲ あのがむしろな感じが・・・

あ、でもこの小説は一切関係ないですよっほんとですよ？

そういうえば読み返してみればオンラインゲーム要素が足りないな・・・

・

おいおいなんとかしていくつもりです はい

そろそろ大人しくしてたナクスさんが暴れだすかもしれません。

ソフィアの思惑（前書き）

ナクスさんまだまだ暴れ出しませんでした。
ナクスの戦闘シーンはもうちょっと後になりそうです。

ソフィアの思惑

「単刀直入に言います生徒会に入ってください」

「断る」即答。

なんで俺がこんな面倒くさい生徒会なんかに入らなくちゃいけないのか全然わからん。

俺達は生徒会室に来た。

生徒会室といってもほとんどソフィアの私室になっているといっても過言ではない。

豪華絢爛な調度品　ふかふかのソファ―　無駄に大きい執務机　様々な食器が収められている棚

どう見たって学園に最初からあったものじゃないだろこれ。

後ろにはキョロキョロと辺りを見回す、紅陽と蒼双とルイフェランズ。

あの後、色々と姉妹が爆発してルイフェランズがそれを宥め、俺はソフィアの無茶苦茶ぶりを非難しアサギが睨みソフィアが受け流し結局生徒会室まで連行されることになったのだが生徒会に入る入らないの話を聞きつけて三人はどうしてもついてくると言い張りここまできたのだった。

ソフィアと俺は個人通信で会話しているので他の四人には聞こえて

いない。個人通信とは簡単に言えばヘッドホンを付けてする一対一のボイスチャットのようなものだ。

「いいんですのナクスさん？」

「何がだ」

「あの事を公にしていまいますわよ」

「あの事とは？なんのことかわからんな」

実際心当たりが多すぎて検討もつかない。

「貴方の素性をばらして差し上げても私は一向にかまわないのですのよ」

「どこまで知っている」

俺は自分の声が冷たくなるのを感じた。

「嫌ですわナクスさん私まだ何もいっておりませんのにそんな怖い顔をして私恐怖のあまり貴方の素性を大声で叫んでしまいそうですわ、まるで痴漢に襲われた時の淑女の様に」

「この際どこに淑女がいるのかは置いておくが、どこでそれを知った」

どうやら俺の素性はばっちしこの腹黒生徒会長にばれてしまっているようだ。

だとしたら非常に厄介だ。まだ俺はオールツールでやり残したことがごまんとある。

ここで俺の素性がばれた場合。ありとあらゆるPKとPKK。腕に覚えがある猛者。そしてナンバーズ。

奴らが太挙してこのオールツールに押し寄せる事間違いなしだ。

それだけ絶望の深淵というビッグネームには意味があるのだ。

PKやPKKにも恨みや憎悪、憧れや尊敬や妬み等色々抱かれている。そしてナンバーズは……。

どちらにしろもうここにはいらなくなるだろう。

それだけはどうしても避けたい。

「貴方のこと色々調べさせてもらいましたの。でも、普通の方法では全然わかりませんでしたわ。それで私の祖国イーグリアスのマスターベースにハッキングしてナクスさんのことを検索にかけましたの。そしたら出てくるわ出てくるわあなたの面白おかしい経歴が、私これでも感心していますのよ。私もあの事件で命を拾ってもらった一人なんですからね」

「あの事件………と言われても。俺が関わった事件は多すぎてどれのことだかわからないな」

「イーグリアスでの機神起動実験で起こった事件です。」

「あれか………ペンディクトの奴まだ起動実験には早いと言

「つたんだが勝手に持ち出してな……すまなかった」

「何を言ってるんですか、アナタのおかげで被害はほぼゼロで済んだんじゃないですか。感謝こそすれ謝られるようなことではありません」

「それで、お前は一体何を本当は俺に求めているんだ」そろそろ教えてもらってもいい頃だろう。

「いえ……私は純粹に貴方に生徒会へ来ていただきたいのです」

「それがわからん、俺が生徒会へ入ることに何の意味があるというんだ？」

「今年この学校に入学してきた者たちはみんな各国の貴族や実力者の子供ばかりです。そのためか些細なことでのいさかいが絶えないのです。」

「確かに……」この学園は人種がばらばらに集まっているわけだから仲が悪い国同士の者はいがみ合うことが多々あるだろう。しかも各国の実力者となればそれは如実に現れるはずだ。親が実際に戦っていることもあるはずだからだ。

しかし、それで俺を生徒会に入れるという意図がまだ掴めていなかった。

「わかりませんか？」

「もったいぶらずに早く教えてくれ」

個人通信って言うのは、なかなか恥ずかしいのだ。

有効範囲もそんなに広くないので必然的に顔が近くなるし。

とかさつきから後ろの奴らの視線が痛いぞ。特にアサギの奴今にも飛び掛ってきそうな形相している。

黙っていれば奴もそれなりに見てくれはいいんだが・・・。

「つまりですね、成績最下位・実技最下位の貴方がこの名誉ある生徒会に入ることによって・・・どうなると思います？」

「みなさんの興味の対象はナクスさんへと一気に変更されるはずですよわ」

腹黒生徒会長の意図はすぐに理解できた。

つまるところ俺を餌にしようというわけだ。

各国の実力者や貴族ともなればそのプライドの高さたるや想像に難くない。

そのプライドを刺激してやろうというわけなのだろう。

成績最下位・実技も最下位の駄目駄目な転校生Aが生徒会に入れるというのになぜ自分が生徒会に入れないのか？というか呼びがからないのか？

そうしてプライドが高い奴らは成績最下位・実技最下位である転校

生Aに対し興味が移り、いさかいは減るということなのだろう。

なんて奴だ………悪魔が………悪魔がここにいる！！

それって全然純粋な理由じゃないし！！俺がどうなるかってことを全く考慮してない計画じゃないか。

だかしかし、これを断ることは俺にはできないのも分かっている。

あちらは俺がP K Kであるということを知っている。

つまりは既にその時点でこの会話の主導権はソフィアが握っているということだ。

ばらされたくなければ、素直に生徒会に入れ。そう瞳が語っている。

「なるほど、俺に選択肢は無いってことか」

「そうゆうことです、観念して生徒会に入りなさい」

仕方が無い。

オールツールではあまり目立たないようにしておきたかったが俺がP K Kだとばれた時点でその望みはたたれたと言ってもいい。

降りかかる火の粉は払うだけだ。これから今までもそうしてきたのだ。

「わかった生徒会に入ろう」

「素直で嬉しいですわナクスさん、ようこそ生徒会へ歓迎いたしますわ」

満面の笑みを浮かべるソフィア・クロス

うかつにも、その花が咲いたような笑顔に見惚れてしまった俺だが。

その後、アサギが生徒会に入るための試験とか言って提示してきた条件にまた頭を抱える事となった。

ソフィアの思惑（後書き）

まだまだ書き方が安定してないのでもうちょっと勉強してきまふ
アイディアばっか先行しちゃって実力不足が痛いです。

P K K ナクスの場合（前書き）

あとがきを書いてから前書きを書いています

あとがきはスルー推奨です

趣味に走ってすいませんほんとorz

PKK ナクスの場合

「さあ覚悟はいいかしら？」

ナクスは周りを見渡した。

正面にはアサギ。

その右斜め前には紅陽。

そして紅陽の正面には蒼双。

それぞれ思い思いの武器を携えて戦闘態勢に入っている。

皆さん目がギラギラしております。その目は心なしか・・・いや間違いないこの俺に向けられている。

そしてナクスはというとこれまたしょぼそうなナイフ一本携えて脱力し全くやる気がないポーズである。

命の危険だけはひしひしと感じているのではあるが。

ここは闘技訓練場。小規模なコロッセオには、今日一日の快晴を約束するかのような日差しが差し込んでいる。

ああ雲ひとつ無い快晴。眩しい。こういう日はまさに昼寝をするのに限る。

そこでナクスはもう一度ぐるりと周りを見渡す。

そこには今か今かと戦いが始まるのを楽しみにしている三人の女戦

士。

ナクスは今度は観客席に目を向けた。

そこには、まるで女王のようにひとときわ高く豪華な席に鎮座するオールツール学園生徒会長ソフィア・クロスとその脇でこじんまりと席に着きうつむいているルイフェランス・トラインの姿があった。

自分達を見ているナクスに気がついたのか二者二様の反応を返してくる。

前者は満面の笑顔で後者は申しわけなさそうな顔で頑張ってくださいと語っている。

それを見たナクスは深くため息。

どうしてこんな事態になっているのかって？

こっちが聞きたいくらいだ。

だが、そうだ全ての原因はアサギの一言から始まったのだ……

（△、）回想

生徒会長ソフィアが俺に生徒会に入ると強要しそれを俺が承諾した直後のことだった。

アサギいわく「お前が生徒会に入るといふのならそれ相応の実力を

示さなければならぬ」だそうだ。

いつから生徒会という組織が実力主義になっていたのかナクスのあずかり知るところではないが、果たしてこの風紀委員長様は俺の成績を見てものを言ってるんだろうか？

ナクスは助けを求めるつもりで生徒会室の執務椅子にどっかりと腰を据えてくつろいでいるソフィアにアイコンタクトを送った。

そのアイコンタクトが通じたのか通じていないのか顎に手を当てて考える動作をするソフィア。

考え込んでいる姿もなかなか絵になる会長だ。まるで一つの完成された彫刻のようにも見える。

そうだな、題名は『考える巨乳生徒会長』とかいうのはどうだろうか。

とくだらないことを思いながらソフィアの答えを待っていたナクスだが。

「ナクスさんは、ばっちこい雑魚共がいくらでも束になったところで俺様に敵うはずがないだろゴミ屑とおっしゃっておりますので問題は無いと思いますが試験はいつ、どこで行うのが問題ですわね」

全然通じてなかった／（＼、＼）／

まだアイコンタクトをしなかったほうがましだった。というかアイコンタクトでそんな複雑な意味が理解できるはずないだろ。

ほら、見てくださいよアサギさんの顔。

ちょっと放送できませんよあの顔。

それなりに整った顔立ちも今では見る影も無く・・・あれは鬼か般若の顔と形容すべきだろう。

アサギの形相にばかり目がいていたせいで気づかなかったが、その背後でもう二人ほど全身が怒りでぶるぶるしているお方が二人ほどいる。

なんという単純構造（一〇一；）

「そ・・・それじゃあ、今度のクラス対抗試合をナクス君の実力試験ってことにしたらいいんじゃないですか」

ここでナイスタイミングのルイフェランスが助け舟を出してくれた。ありがとう。ルイフェランスさん、まるで貴方が天上から使わされた女神様のように見えるよ。

アサギは三年生だから、一年生のみで行われるクラス対抗試合では戦うことはまずない。今のアサギを相手にするのは正直つらそうだ。

後は紅陽と蒼双をなんとかすれば万事オーケー。

こいつらは単純だからきつと甘いもので釣ってやればすぐにこちらになびくに違いない。

という打算はソフィアの次の発言で脆くも崩れさってしまった。

「そうですねえそれもいいんですけど私、今すぐナクスさんの実力を少し確認しておきたいですわ♪」

（△、△）そして現在に至る。

うわああああああああああああ。

どうしてこうなった。

しかし、今更嘆いても仕方ないわけで。

開き直りの速さが唯一の取り柄なのだ。

ここまできたらもう引き下がる事もできない、というかもう引き下がる気もさらさらなくなった。

もう、ここは戦場だ。やるかやられるかそれだけ。

今までの経験がナクスの俺の神経を研ぎ澄まさせる。

意識を切り替える。

そこには、今までのナクスとは一線を画するPKKが居た。

かのように見えた。

PKK ナクスの場合（後書き）

次はバトル展開が予想されます。

きちんとした戦闘シーンなどこれが始めてであります。

まだまだ拙い文章ですがこれから生温かい目で見守ってくださいと有り難いです。

と全く関係ないのですがここで僕の好きなアニメを紹介したいと思います。

スクライド ブラックラグーン ダーカーザンブラック

特にこの三作品が大好きですねぇ

スクライドはあの熱い展開がなんというかたまらないですよ

カズマああああああああああ いやぁあんな風にド派手に喧嘩してみたいもんですね。

ブラックラグーンはもうレヴィがナイスですよ。

クールです はい

でも意外とロックも好きなんですねぇこれがまた。

一期の最後のほうでロックがレヴィに啖呵きつて言い合いになるとこなんかもうロックいいよロックたまらない

ダーカーはヘイがカッコいいの一言に尽きますね。

まさにクール。日常で演じている リ・シェンシュンとのギャップもまたすばらしい。

と小説と全く関係ないことをくっちゃべっちゃいましたがいやほんとすいません。

学校じゃなかなかこの三作品で語り合える友人が少なくて少なくて。

みんな生徒会とかレールガンとかそのおとしものとかで騒いでますからねえ

僕もまあ例外なくそれで盛り上がってますが。

やっぱり自分の好きなアニメでも語りたい。(ーωー；)

変なことばっかすいませんほんと 見捨てないでくださいorz

感想なども一言でもいいので送ってくだされば嬉しいのですが。

いえ、無理ならいいんです。き・・・期待なんかしてないですからねっ

つかこれ友人に見られたらドン引きだな・・・・・・・・。。

ツンデレとヤンデレキャラも登場させないとまずいな。

戦闘開始

いつの間にか闘技訓練場は噂を聞きつけた野次馬で満員寸前の様相を呈していた。

皆、この一戦にかなり注目している。

それもそうだろう。新入生の中でも屈指の武術を操る四神姉妹に鬼の風紀委員長アサギと最下位でダメトップの転校生のバトルロワイヤルだ。

ダメトップのナクスはともかく。他の三人は学園でかなりの有名人。自然とその注目度は高くなる。

ナクスも別の意味で注目を集めていると言える。集めているのはあるが。

いわく、裏口入学で財力にものを言わせて生徒会入りまで果たそうとしているとか。

ソフィアの計画はもう実を結び始めているようだ。

観客席から敵意やら嫉妬やら嘲りやらの視線が自分に集中しているのを感じる。

ナクスはそれらを完璧に意識の外に遮断し、目の前の敵に集中した。

まずは、アサギ。イーグリアス人。メインウェポンは両手に持っている二丁の拳銃。

さっき、紅陽と蒼双の試合をとめるために使ったロケランのこともある。

ジョブはガンナーの上位職であるハウンドドッグ辺りが妥当だろう。

次に、紅陽。レイハード人。メインウェポンは一对の短剣。

レイハードのジョブはほとんどが近接戦闘用であるため特定が難しい。

たぶん剣舞士の上位職のブレードーか戦乙女といったところだろう。

最後に、蒼双。姉と同じくレイハード人。メインウェポンは薙刀。

薙刀を取り扱うジョブはレイハードでもそんなに多くはない。

こっちは戦乙女の可能性が大だ。

一通りの分析が済んだのとちょうどソフィアがカウントを始めるのが同時だっ

カウントが終わったの同時に弾丸のように距離を詰めてくる三人。

一般的な実力の持ち主では一見して、それはただの黒い点に見える
だろ。

それほどの速さ。敏捷ステータスも並外れている。

この分だとスキルの熟練度も相当なものだろう。

一番弱そうなのから排除するという点で彼らの意思は一致したよう
だ。

黒衣の懷から素早く本を取り出す。

メインウェポンにマジックブックをセット。サブウェポンに短剣を
セット。

動作は一瞬。

だが、その一瞬で三人は眼前にまで迫っていた。

三者三様の悪魔の笑みが広がる。声に出さなくてもわかる。心の中
ではこう叫んでいることだろう。

「死ね!!!!!!!!!!」

一応事前に説明されたルールで相手に致死量のダメージを与えるの
は禁止されている。

戦争では攻撃停止プログラムが発動するが、闘技訓練場では攻撃停止プログラムが発動されることはない。

なぜ、戦争で攻撃停止プログラムが発動して闘技訓練場では発動しないのかについては、様々な憶測が飛び交っているが未だにその謎が究明されたという発表はない。

ナクスは眼前まで迫った三人を見据え、短く詠唱。

「FREEZE」

効果は一瞬。だが、効果はきめんだった。

紅陽は腹が煮え躁りかえそうだった。

なにせ、あのナクスに。あの実技最下位のナクスに。なにをやってもダメダメなナクスに。

馬鹿にされたのだ。

「なあゝにが雑魚が束になっても俺様みたいな完璧でパーフェクトな神にお前らのような醜く汚いゴミ虫どもが触れることすらできないだろうですって!!」

もちろん、誰もそこまで言っていないのだが。

堪忍袋の緒が目に見えないほどの太さしかない四神紅陽にとってそんな些細な事は全く考慮するに値しないことなのだ。

駄目ナクスが自分を侮辱したという事実だけあればそれで十分。

もちろん、ナクスは紅陽を侮辱などしていないのだが。生徒会長が
ああ言った時点で紅陽の中でそれは事実として受け止められたのだ
った。

生徒会長　超えられない壁　ナクスである。

それからトントン拍子に事が進んで私と蒼双とアサギ先輩はナクスを交えたバトルロワイヤルを展開することとなった。

紅陽としてはもちろんナクスをふるぼっこするのが第一目標であるが、オールツール学園風紀委員長であるアサギの実力を試してみたという気持ちもあった。

風紀委員長としての立場上、避けては通れないのが生徒間で発生するいざこざの鎮圧である。

つまり、一般生徒よりは遥かに高い実力の持ち主であることが予想された。

レイハード人の血が流れている紅陽。しかも、飛びぬけて武術に優れた四神の血が流れている紅陽には自分より強いかもしれない相手というのとはとても興味をそそられるのだ。

戦いたい。そして、倒したい。そして、もっともつと強くなりたい。

「そう、強さだけが自分を自分として証明する唯一の手段。そして、存在意義。」

それが四神紅陽。それが私の在り方。そして、この世界の全て。

しかし、それが揺るがされそうだった。

カウントが終わった時、私とアサギ先輩と蒼双はほぼ同時にナクスに向かって飛び出した。

当のナクスはというと、黒衣から素早く本を取り出し、メインウェポンに換えているようだった。

戦闘が始まってからメインウェポンを交換するなんて自殺行為すぎる。

それを見て私が感じたのはやっぱりという安堵の気持ちと失望の気持ち。

ナクスを始めて見た時、私は何かびびつと電撃が走りぬけたように感じた。

私が長年追い求めていたもの。私が恋焦がれている何か。それが目の前の男には在る。

そう感じたのだ。しかし、そんな予感も一瞬で霧散してしまった。

その後、もう一度ナクスを見ても何も感じとることはできなかった。

それから紅陽は何度かナクスにちよつかい、もとい攻撃を仕掛けたのだがいつものらしくらりとかわされてしまった。

成績は最下位。

実技も最下位。

やる気なし。

気力なし。

いいとこなし。

やっぱり、あの時の予感自分の思い違いだったのかと諦めたところにこのバトルロワイヤルだ。

もう期待はしていなかったが、最終確認にはちょうどいいと思った。

なのに…………。

「FREEZE」

短く、しかし鋭く紡がれたその詠唱に……………全てが止まった。

そして、次の瞬間には私を含めた三人はもの凄い勢いで吹き飛ばされコロッセオの壁に叩きつけられていた。

戦闘開始（後書き）

何が起こった

決着（前書き）

どうしてこうなった？

決着

紅陽含め三人は一瞬何が起こったのか理解できなかった。

ナクスが使ったのは詠唱魔法。

それもかなり特別な部類に位置する。一言で発動する詠唱魔法は並大抵のウィザードでは使いこなすことすらできないのだ。

それをいとも簡単にこなしたこの事実。

にわかには受け入れがたい。

突然の出来事に観客は静まり返っている。

ナクスの詠唱は短く小さい声だったので何が起こったのか理解できていないのだ。

次はこちらからだ。

ナクスは、マジックブックをしまつて、また双剣持ち換える。

とりあえず一番場慣れしていそうなアサギから様子を見る。

元々勝ちにいく気などさらさらないのだ。

勝ったとしても無駄な注目を集める上に色々面倒なことを多数抱えることになる。

そんなのはまっぴらだ。めんどくさいし……。

足に力を込めて跳躍。

アサギが倒れているほう走り出す。

しかし、アサギは早く体勢を立て直したようだった。

伊達にこのオールツール学園の風紀委員長ではないということかな。

見れば他の二人も体勢を立て直しているようだ。

これは予想外。

そんなに軽い詠唱魔法ではない。

どうやら二人を甘く見ていたのは自分だったようだ。

しかし、今更方向転換もできない。

アサギに向かってスキルを発動する。

双剣スキル派生二種『クロスディバイディング』

システムによって普通の人間の動きではありえない軌跡を描いて双剣が高速で振られる。

アサギは、それを双剣の軌跡に沿って回避しながら二丁の拳銃で応戦。

放たれた無数の弾丸は、ナクスのわき腹と頬をかすめていった。

(あつぶねー)

それにしても良い動きしてるな。

ナクスは、更にアサギとの距離を詰めるためにパッシブスキル縮地法で高速化しアサギへと突っ込んだ。

アサギの顔に焦りが浮かぶ。

(もらった!!)

上位双剣スキル『喰狼』を発動。

ナクスの持つ双剣がまるで生きているようにアサギへと吸い込まれ・
・・・・。

「がき
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい」

弾かれた。

横から紅陽の短剣が差し出されナクスは双剣を防いでいた。

必殺の攻撃が外れたことにより隙ができたナクスに紅陽の短剣が振り下ろされる。

その手を蹴り飛ばし、反動によって後ろへと飛ぶ。

「やってくれるじゃないの」

紅陽の目がナクスを見据える。

その目には怒りというより高揚・期待・興奮が見て取れた。

どうやらコレはめんどくさい。

ナクスはこういった相手があまり好きではない。

絶対粘着質だもんなこのタイプ……。

思考は一瞬。

そして紅陽の姿が消えた。

この速さなら、まずナクスは付いてこれないはず。

ヴァルキリー
戦乙女の特性スキル『アクセラレート』

このスキルは使用者の移動速度を大幅に上げることのできるスキルだが、防御力も大幅に下がるというリスクを抱えている。

（攻撃なんて当たらなければどうということはないのよっ）

高速化した紅陽は、一瞬でナクスの背後へと回り込みその首筋目掛けて短剣を一閃した。

ナクスは、かろうじてそれを右手の短剣で受け止める。

攻撃を受け止められた紅陽は残念というよりも、ワクワクが止まら

ない。

（なんなのっなんなのよこいつっ！）

紅陽は続いて下段回し蹴りを放つ。

それもバックステップで避けられる。

そのままスキル『ジャブクリティカル』を放つ。

短剣がシステムによって補正された動きでナクスの肩と足へと目にも留まらぬ速さで突きこまれた。

それをナクスは、巧みに双剣で弾き飛ばしながら紅陽の腹に蹴りをぶち込んだ。

スキルを放った勢いでナクスの蹴りを受けた紅陽は一瞬息が止まった。

『アクセラート』の反動で通常の1.5倍ほどのダメージを受けて蹴り飛ばされ地面へと紅陽は転がっていった。

ハイレベルな戦闘に野次馬もしんと静まり返っている。

誰もがこの戦いに見とれているのだ。

あのナクスがここまで戦えると誰が思っただろう？

いや、誰も思っていなかった。

生徒会長ただ一人を除いては・・・・・・・・。

やっぱりね・・・・・・・・。

ソフィアは、確信した。

彼の力は本物だと。 （ゾクゾクしちゃうわぁ）

「加勢しないのか？」

ナクスはさつきから紅陽と自分の戦いをじっと見つめる視線に気づいていた。

ナクスに声をかけられた当の本人はまだ、ぼうっとしている。

「強い・・・・・・・・」

しばらくしてから蒼双は一言そう呟いて、薙刀を下段に構える。

それに合わせてナクスも双剣を構えなおす。

そして、気づく。

自分が囲まれていることに。

（これはまずいな・・・・・・・・）

三人が一斉に動いた。

薙刀に短剣、弾丸がナクスに迫る。

ナクスは弾丸を右手の剣で防ぎながらも一方で蒼双の薙刀を防ぎ、紅陽の短剣を避けた。

だが、流石にナクスも三人に囲まれては、ひとたまりもない。

すぐに壁際へと押し込まれた。

「私はアンタを見誤っていたようねナクス」

紅陽の燃える様な瞳がナクスを射抜く。

「思ったよりもずっと強くて……私久しぶりに体が火照って仕方がないの……ねえ……これで終わりじゃないんでしょ？ 見せてよ、貴方の全てを……」

「何を言ってるんだレイハードの戦闘狂女がさっさとこの糞虫をぶち殺してやる」

そう言ったアサギは、おもむろにチャカの引き金を引いた。

パーンと乾いた音を立ててナクスの額に弾丸が命中し……。

クリティカルヒットを受けたナクスの体は。

デスペナルティを受けて……。

消滅した。

決着（後書き）

もっと学園部分がやりたかったのでもうなりました

遅延魔法『デュレイスペル』

ナクスの消滅に対する反応は引き金を引いたアサギから観客まで多種多様だった。

アサギはナクスが消滅したことをとっさに理解できなかったようである。

俺が消えた跡を凝視したまま固まっている。

紅陽や蒼双も似たようなものだった。

それもそうだろう闘技場では滅多にこういった事故は起こらないように設定されている。

事態を理解し始めたやじ馬からもどよめきが聞こえ始めた。

「おいおいどうしたんだ」「ナクス君どこいったの?」「まさかデリート事故か」

「そんなわけないだろう」「いやひょっとすると・・・・・・・・・・」「うそだろ・・・・・・・・・・」

どうやらやりすぎてしまったらしい

もうそろそろこの茶番を終わらせるべきだな

俺は闘技場に入ってからずっと発動させておいた範囲幻覚魔法スキルをディスプレイした。

この範囲魔法は、あらかじめ俺がこの闘技場に設置していたものだ、効果は現実感のある幻覚を見せるというもの。

その幻覚魔法で俺は、闘技場にいる全ての人間に、ナクス本人が紅陽にアサギに蒼双と戦っているかのように錯覚させたのだ。

本当の戦闘になったら、俺は自分を抑えられるかどうか分からない、それが怖かったのだ。

闘技場全体にひびが入ったかのような亀裂が生じはじけた。

俺は皆がそれに気を取られているうちに俺が消滅した場所にこそそこそと移動した。

ドッキリでしたと謝るなら今がチャンス

「いやーすま「キャー皆さん見てくださいあそこにさっきデリートされたはずのナクスさんがいらっしやいますわ」

幻覚魔法のデイスペルに気をとられていた面々の視線が一気に俺へと突き刺さる。

ソフィアの奴！ やってくれるぜ・・・・・・・・

完全にタイミングをはずされた 視線が痛すぎる

「ア・・・・・・・・アンタ・・・・・・・・」紅陽の越えは震えていた。

やりすぎたな。どう考えても。

「すまんっこんなに大事になるとは思わなぐあああああああ」

俺の体に無数の拳が突き刺さり吹き飛ばされた。

「言いたいことはされだけ？」

「ゴミ虫が・・・・・・・・」

「もっかい死ね（´△｀）」

この後、俺は死ぬほどひどい目にあった。

+

「それで？なんであんなことをなさいましたのナクスさん」

あの騒動の後、俺は会長室に呼び出されこうしてソフィアに尋問を受けている。

しかし、こういったことを処理するのって先生方のお役目じゃないのか。

どんだけ会長の権限強いんだよ。

「別に・・・・・・・・ただ戦うのがだるかったただけだ」

「またまたくご冗談を」

三割くらいは事実である。

「まあそんなことはどうでもいいんですけどね」

どうしても良かったのか…………。

「これをどうぞ」とソフィアが手渡してきたのは一枚の用紙。

俺はソフィアに渡された紙に目を通す。

ぱっと見だけでこいつが今回もよからぬことを考えているのだけはわかったけどな。

「校外実習授業？」

「そうですよ！！今度の実技授業の時間に一年生の実力が高い生徒を集めてクラス無関係の合同授業があるんですわ」

「はあ…………それと俺にどんな関係が？」

「察しが悪いですわねナクスさん」

いやまあなんとなくは分かる。

「もちろんっその実習にナクスさんも参加していただくのですわ」

「おい…………ちよつとまでよ今まで俺は実技の試験で最底辺の結果だったんだぞそれをどうやって…………」

俺みたいなダメ人間がそんなエリート集団に入っていけるわけないだろ。

「あら．．．．アサギ達とは互角以上に戦っていたじゃありませんか」

「いや、だからアレは幻覚魔法の効果で実際は全然戦ってないんだぞ」

「でも、あのスキルは．．．．まあいいですわ」とニヤニヤ笑う会長。

どうしてそこでニヤニヤすんだ．．．．。

たぶん、こいつはあのスキルの特性を知っているんだな。

「とにかく、もう参加するように手配してしまったのであとはお願いますね（はあと）」

俺は天を仰いだ。

この学園に来てから俺は日和りまくってる。

どうにも調子が狂う。

しぶしぶ参加することを承諾して俺は生徒会室を出た。

遅延魔法 (デュレイスペル) (後書き)

ちまちまと書いています

更新遅いですが

俺の妹がこんなに可愛いわけがないが面白すぎるせいなんです
すいません・・・

廊下

生徒会室から出た俺は廊下を歩き教室を目指した。

課外実習とか絶対に会長の悪巧みが働いてるわけで、今から気が重
い。

「仕方ないこととは言え、めんどくせーな」

「何がめんどくさいって？」

「そりゃ課外実習とやらがだよ」

「ふーんアンタも出るんだ」

「ああ………めんど………っておわっ」

紅陽の奴いつの間に隣にいやがった!?

つり目じゃなきやもつと好印象なものを美人なのに絶対に損してる
よなこいつ。

間近で見ると改めてそう思う。

「何よ」

「いや別に」

「その実習私も参加するんだけど」

「うえ・・・・・・・・お前もかよ」

「何よ」

だから、そんなに睨むっての。

「いや別に」

「っていうかなんでアンタみたいなのが一年の有力生徒が参加する
実習に出られるわけ？」

「生徒会権限」

俺だって参加したいわけじゃない、ただあの生徒会長と揉めごとを
起こしたくないんだ。

わかるだろ？そんなことになったら一日で俺が学校中の晒し者にな
るってのは目に見えてるんだ。

いまさらそんな愚行を犯すリスクを背負うわけがない。

「うっわ職権乱用」

紅陽の軽蔑のまなざしが突き刺さる。

こっち見んな。

「俺だって参加したいわけじゃない」

「あーあー闘技場で戦ってると思ってた時はすごいワクワクしてたんだけどなあ」

「うるへー」

俺が幻覚魔法を使って戦闘してなかったことは、俺がぼこぼこにされてデリートされそうになった後に説明している。

「まあやっぱりアンタみたいな最底辺の人間なんてそんなものよね」
紅陽の侮蔑を含んだ口調にさすがに俺もムツときた。

「俺が死んだと思って震えてたくせに……あん時のお前の顔といったら」

つい心にもないことを言ってしまった。

「バカっ!! 私ほんとにアンタがデリートされたと思って……」

いきなり声を荒げて紅陽は俺を睨みつけた。

そんな顔すんなよ……。

「悪かった」

「もう二度とあんなことやらないで」

よく見たら紅陽の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「ああ」

もうしない

人の気持ちを考えない言動と行動は、君の悪いところだよナクス。

旧友の言葉が頭をよぎった。

俺はあれから成長していないってことかな・・・・・・。

教室に戻り紅陽と分かれた。

教室に入った途端に俺にクラスの奴らの視線が集まる。

闘技場の一件があつてからはずっとこの調子だ。

そりゃそうだろう。

成績も実力も最底辺とされていたクラスメートがいきなり生徒会の役員だの鬼の風紀委員長や一年である意味一番有名な姉妹との試合だの、嫌でも注目される。

そういえば、あの腹黒生徒会長はこれが狙いだとかなんとか言ってたな。

現に、俺に集める視線はほとんどが敵意。

ぽっと出のどこぞの馬の骨に生徒会の役員というおいしいポジションを取られたってのはやっぱり衝撃だったのだろう。

俺にとっては全然おいしくないポジションなんだが、というか欲しかったら交代してやるから俺に平凡な日常を返してくれ。

と心の中で愚痴っても状況は何も変わらないわけで。

とりあえず俺は次の授業を睡眠にあてることを決意した。

実習

課外実習当日。

参加する生徒は、一年生の中でも実力が高い有力生徒十数人。

その中に俺は居た。

よく見れば紅陽や蒼双にルイフェランス・トラインの姿も見える。

なんという居心地の悪さ。

ギスギスとした視線が俺に向かって突き刺さるのが嫌でも分かる。

おいおいこいつら本当に学生なんだろうな。

さっきからすごい殺気が俺に集中しているんだが……。

実習が行われる会場は、オールツール国から200キロメートルほど離れた迷いの森というダンジョン。

薄暗い森にどろどろとした何かが、ときおり通り過ぎていくのがわかる。

まだ、ダンジョンに入る前の入り口の広場に待機しているが、

ランク的に言えばC〳Bランクの難易度のダンジョンであるはずだ。

C〳Bランクといえど、立派に正規軍人に採用されてもおかしくな

いレベルだ。

本当に大丈夫なのか。

CランクモンスターならまだしもBランクモンスターである、ブレイブイーターやスキルキャンセラー持ちのスナイプニードなどのモンスターは、適切な対処方法を知っていなければ倒すのは難しい。

「はい皆さんこちらへ注目してください」

この声は生徒会長か。

俺は声がした方へ視線を移す。

そして俺は信じられないものを目撃することになった。

他の男子連中もはっと息を呑んだ

俺達の視線の先、そこには体にぴっちりなバトルスーツを着込んだソフィア・クロスの姿があった。

バトルスーツには、申し訳程度に取り付けられたアーマー以外には素っ裸に黒い布をかぶせような代物で、ただでさえ犯罪的なまでのポリウムであった、豊かな双丘が更に殺人レベルにまで拡大されていた。

たぶんイーグリアス製のスーツだな、良い仕事してるぜ。

「フフ、みなさん私の艶姿に言葉もないようですね」

ソフィアはご満悦にもその場で一回転。

いいのかこれ、放送禁止レベルだ。

前屈みになって身動きさえ取れない連中すらいるんだが。

「さあ今から課外実習のルール説明しますわ、ルールは簡単、この森にいるボスモンスター『スラッシュラック』を一番最初に倒したものに今度のオールツール闘技祭のシード権と賞金500万ゴールドが与えられますわ」

オールツール闘技祭のシード権とやらはともかく500万ゴールドはおいしいな。

「ちなみにワタクシも参加しますわ」

というか絶対これ会長の独断で行われてるよな。

そして500万渡す気ねーだろ。

「おい、聞いたかよナクス500万だぜ500万まじやべー」

また、めんどくさいのが来たな。

「ああ、500万はおいしいよな」

「それに会長のあの格好たまらねえ、いつか俺も会長に認められるような男になってモノにしてやるぜっ」

俺の隣で息巻いてるこいつは、ナック・ベルラット。

紅陽の赤髪とは違い、こいつの髪は赤いというよりは黒に近い赤色をしている。

制服の上からでも体が鍛え上げられているのがわかる。背も高く、俺よりは20センチ以上高い。

同じクラスのクラスメートであるが、かなりのお調子者で実力はあ
るのだが、かなり馬鹿っぽいのがかなり傷だ。

「こんなとこでだべっていいのかよ、みんな自分と組む奴を探すの
に必死だぜ」

今回、単独行動するのも自由だが他の奴とパーティを組んで行動する
のもOKとになっているらしく

行動が早い奴はさっさと自分のパーティに実力がある奴を誘い込んで
いるようだ。

「俺はいいんだよナクス、一匹狼ってやつさ、それにパーティなんて
組んでちんたらやってたら賞金も山分けになっちまうからな」

そう言ってナックの奴は迷いの森へと走っていった。

まあ確かに、そこには同感だ。

「俺もソロでいくとするか」

どうせ俺なんか誘おうと思う酔狂なやつなんていないだろうしな。

そう思い俺も森の中へ入ろうとしたら後ろから呼び止められた。

「ナクス！！あたし達と組むわよ」

ここにも酔狂な奴が居たんだった。

誘ってきたのは、紅陽、蒼双、ルイフェランスの三人パーティ。

「三人もいりゃ十分じゃねーか俺なんかを誘う必要ないだろ」

「勘違いしないで！！ルイの頼みじゃなかったらアンタなんか誘わないんだからっ」

「ルイ？」

「あ、私のことです」

紅陽と蒼双の後ろに居たルイフェランスがおずおすど前に出て来た。

「紅陽さんがルイフェランスって長くて言いにくいからルイでいいよねって言うてくれたので……………」

はにかんでるルイフェランスさんまじ天使。

紅陽の妹である蒼双は得意の獲物である薙刀を振り回している。

「ナクス、来る（´△｀）　　じー」

「蒼双、顔文字入れるのなんとかならんのか……………」

「そんで？来るの来ないの」

紅陽はじれったそうに地面を蹴る。

確かに、この誘いを断る理由は特にない。

しかし、ソロの方が断然報酬がおいしいのもまた事実。

思考は一瞬。

「誘ってもらって悪いが今回は遠慮しとくぜ」

「え・・・ええ・・・ナクスさん一緒にいらっしやらないんですか」

ルイフェランスさんのオロオロしている姿を見ると少しばかりパーティに入ってもいいかな～と思ってしまったが、それはそれはこれ。

今回は利益優先。

俺が今ここにいるのは遊びに来ているわけではないことを忘れてはいけない。

「今回は利益優先ってことで、俺も500は捨てがたいんでね」

紅陽と蒼双の冷めた視線が突き刺さる。

「あっそ、アンタなんかには狩れるとはとても思えないけどねえ」

「ソロ専乙」

ひどい姉妹だ……。

「それじゃルイこんな奴ほっというてさっさといきましょう」

「え……あ、はい」

なぜか申し訳なさそうにこちらを見るルイフェランスさん、天使や・
・・・。

その姿を見るだけでついつい口元が緩んでしまう。

俺は笑いながら軽く手を振り三人を見送った。

そして……。

「おい、上手く隠れてるつもりなんだろうが……殺気を消すの忘れてるぞ」

実習（後書き）

アラドでS I きましたねえ
絶賛サモナーでエンジョイ中あります

襲撃

疲れる。どうしようもなくだるい。

ここは、オールツール中立国家から200キロメートルほど離れたダンジョン迷いの森の中、俺はオールツール学園の生徒が集合していた場所から迷いの森へ入り、どんどん中心部から離れていた。

理由は、さっきからずっと自分の気配を殺そうともせず尾行を続けている奴のせいである。

こんな所で問題を起こされては、どうしもないと思いオールツール学園の生徒が戦闘している区域から後ろの誰かを離しているわけだ。

なんで俺がこんな目に逢わなければならないのだ。

昔から、こんな状況はよくある事だったが、やはりしんどい事この上ない。

森のはずれまで歩き、この辺りなら誰も来ないだろうとあたりをつけて立ち止まる。

ゆっくりと振り返ると尾行していた奴も5メートルの間隔を空けて止まった。

姿は見えない。うっそうと繁った奇妙な形の植物が視界を限定しているせいだ。

「こんな所まで、御苦労なこった、そろそろ姿を見せてくれないか」

「……………本当だわ、この私が貴方のような下賤な輩のために、こんなところまで足を運ばなければならいなんて、屈辱だわ」

繁みから姿を現した少女はこの場に全くそぐわない黒いゴスロリのドレスに身を包んでいた。

漆黒の黒い髪を長く伸ばし、精巧な人形のように血の気ない顔、氷のように無機質で冷たい瞳。

歳は13〜14くらいだろうか。

ナクスは確認するように、相手にカーソルを合わせる。

彼女の名前が表示される。

その色は赤。

レッドネームプレイヤー。

名前の色には様々な意味が存在する。

例えば一般人ならば白か黒て表示されるが、黄色などはNPCを現していたり、青色はヒーラーやプリーストなどの支援職を現していたりする。

赤色の意味はPK。

つまり、人を殺した経験のある者に付けられる証、一種の烙印だ。

もう一度俺は、相手の名前を確認する。

そこには、グラトニーと表示されていた。

俺にとっては。正直この名前の方が驚きだった。

グラトニーというのは、正確には名前ではない、このゲームは元々キャラの真名を知られないようにするために自分の持っている称号などを自分の名前の代わりに表示したりできるようになっている。

グラトニーという称号には、一つしか覚えがない。

考えうる限り最悪の展開だ。

「俺なんかに、レッドネームが一体何の用かな」

「最近こんな噂が流れているのよ、あの最強とまで謳われていたPK絶望の深淵が誰かにPKされたってね、もちろんそれは噂にしかすぎない、けどその戦いを見ていた者がいたのよ、彼は言ったわ、それは大地が轟き天が裂けるほどの戦いだった、勝ったのは白髪で黒衣のマルチウエポンだったとね」

「俺がそれだと？」

「私は、全国で旅をし続け、その条件に該当しそうなプレイヤーを探したわ、白髪で黒衣というだけでかなり条件は絞り込まれた、私はそいつらを殺して殺して殺し続けたわ、どれもみんなはずれ、大はずれよ！！私は疲れて

いた、それでこの学園に潜り込んでそれに該当する者がいなかったらもう諦めるつもりでいたのよ、でも私は見つけた貴方を見つけた

わ、闘技場での戦いを見せてもらったわ、あれは素晴らしかった。
あの遅延魔法は使用した術者が本当に出来る範囲でしか幻覚を見せることができないという制約がついているわ、その魔法の中で貴方はあの三人を相手に引けを取らなかつたどころか互角以上に相手をしていた、私は騙されない、貴方にはもっと力がある、そうでしょう、ねえ？」

こいつ……俺を探し出すためだけに大勢の人間を殺してきたのか

「狂ってやがる」

「狂ってるですって、私たちにとってそれは褒め言葉だわ、さあはじめましょう、貴方と私の殺戮ショーを」

グラトニーは虚空に手をかざし、不釣り合いなほど巨大な大鎌を取りだし軽々と右手で握った。

「私の愛しのグラトニーで愛してあげる」

七つの大罪が暴食のグラトニー。

触れた物全てを食らい尽くすといわれる、イリーガルウェポンの一つか。

「くっそ、やるしかねえのか」

「フフ、楽しんでいてね、『暴食の輪舞』!!」

巨大な大鎌が、人間ではあり得ないようなスピードで振り下ろされ

る。

ナクスは、それを地面へ転がって避ける。

転がりながらナクスも自分の武器を取りだす、派手なエフェクトと共にずっしりとした重みが右手へと広がる。

歪な形をしたそれは、まるで生きているかのように脈動し、絶えず形状を変え続けている、辛うじて剣のような形状ではあるが、切っ先には口に牙、右手を覆っている本体には一つだけの目玉が狂ったように動きまわっている。

相手は七つの大罪。

全力でいかなければ殺されるのはこちらだ。

「貴方、それは！そんな武器を使っているなんて・・・・・・・・正気なの！？」

寄生型の黒死剣ブラッディブラッド。

装備中絶えず寄生主のライフを削り続ける代わりに莫大な力を与えるイリーガルウェポンの一つ。

右手に寄生したブラッディブラッドによって激痛が走りゆっくりと自分のライフが削られていく。

最高で五分。

それ以上はもたない。

「最高だわ！最高よ貴方！」

グラトニーの大鎌の振り下ろしを真正面から受け止める。

「これほどまでに私を興奮させてくれる相手は、プライド以来だわ！」

大鎌が常人では目で追うことのできない速度で連続して襲いかかる。

ナクスは、それを正確に全て剣でいなしていた。

そして、連続攻撃の隙間、ほんのわずかな一瞬に剣を振る。

ブラッディブラッド限定スキル『黒死蝶』

黒死剣から伸びた無数の触手が相手を切り裂き喰らうために伸びる。

グラトニーはそれを驚異的な反射神経で切り落とす。

だが、切り落とされた触手のいくつかが空中で飛び散り、グラトニーの体に付着し、彼女の衣服を切り裂き肌に吸いついた。

みるみるうちにグラトニーのHPが削られていく。

「キャアアアアアア、気持ち悪い！なあにこれ！！」

必死に振り払おうとするが、無駄だ。

「そいつらは、ちょっとやそつとのことじゃ獲物を逃しはしない」

「いやっいやあいやあああああああ」

半狂乱になって、グラトニーを振りまわすがナクスにはかすりもしない。

ナクスは、右手を思い切り振りかぶりグラトニーの小さな腕から彼女の武器であるグラトニーを吹き飛ばした。

衝撃で地面へ叩きつけられるグラトニー。

さっきまでの余裕は消え去り、体中を寄生虫に蹂躪され、ゴスロリのドレスは無残に破れ、綺麗に整っていた黒髪は土にまみれ、どうにか寄生虫を体から引きはがそうと躍起になっているが、体内に喰い込んだ蟲は、そう簡単には取り除くことはできない。

「イヤあああああ止めて許してっ死にたくないい」

俺は、冷徹な目で地面をのたうちまわるグラトニーを見下ろした。

もはや、ここにいるのは七つの大罪ではなく、無力な少女にすぎない。

「死にたくないか？」

「なんでもするからっなんでもしますっ止めてええええええええええ」

さっきまでPKとして名をはせていた者が自分の足元にすがりつくというシチュエーションは、ナクスの嗜虐心を大いに誘った。

「それじゃあ、もう二度とPKをしないと誓うか？」

俺の問いにコクコクと頷くグラトニー。

「お前はこれから普通の少女として暮らす
これにも頷く。」

「今日からお前は俺の奴隷として生きる、誓うか？」

少女は頷こうとして、ハッとしたかのような止める、そして俺を憎
悪と殺意のこもった目で見上げる。

「誓えないのか・・・・・・残念だ」

俺は、その場から立ち去ろうとする。

「まっ・・・・・・まっって誓う！誓うからっ！！」

涙を流し、懇願するグラトニー。

見るとHPは既に二割を切っている。

俺は自分でも残虐な笑みが浮かんでいるのが分かった。

システム画面を開きアイテム欄から黒い革製の首輪を取りだす。

その首輪をグラトニーの細い首に巻きつける。

「戻れブラッディブラッド」

ギリギリ四分。

装備を解除した右手は跡かたも無く消え去って手首からは骨と血ま
みれの肉が見えている。

もう少し粘られていたら俺が危なかったな。

グラトニーは激痛と心労で気を失っていた。

ナクスは消え去った右手を治療するために最高級ポーションと生命
の粉塵を調合しながらヒールをかけ、その場に座り込んだ。

治療が終わり、グラトニーの傷を回復させたところで、どこかで実
習終了の合図である鐘が鳴った音を聞いた。

襲撃（後書き）

ナクスさんいつから鬼畜キャラになったんだっけ

真名

「あ・・・・・・・・」

「やっと目が覚めたか」

あの後、俺はこいつを背負ってオールドールへと200キロメートル以上の距離を走ってきたのだ。

グラトニーを背負ってオールドール学園にそのまま戻ることも一瞬考えたが、会長や紅陽の反応を考えれば、それはあり得ないことだった。

傍目から見ればボロボロで服もまともに残っていないゴスロリ幼女を俺は背負っているように見えるわけで、そんなところを見られれば社会的破滅が訪れることは容易に想像できる。

俺は一生ロリコンのレッテルを貼られて生き続けることになること間違いなしだ。

そこで、背負ったままオールドール郊外にある自宅へとグラトニーを運んできたのだが、予想以上にグラトニーは重く、こんなに小さいのにどうしてこんなに重いのかとアイテム欄を見れば、インベントリをレアアイテムが埋め尽くしていた。

おそらく、今までPKしてきた奴らから奪い取ったものだろう。

もったいないので、捨てるのは断念し我慢して運んだ。

PKされた人の遺留品だとかそんなことは考えない。

物に意思や怨念は宿らない、特に俺達の世界ではそんなことを気にしていたら生きていけない。

実際、俺の装備も今まで戦ってきた奴らから押収した武器や防具が少くない。

最初は寝ぼけまなこで俺を見ていたグラトニーだったが、先ほどの戦いを思いだしたのか一気に覚醒したようで俺の部屋をじろじろと眺めまわしている。

unnecessaryなものはほとんど置いていない、簡素な部屋。

ベッド一つに机と椅子が一つずつ置かれている。

「貴方、私をどこへ連れ込んだの」

「俺の部屋」

それを聞いたグラトニーは一気に顔を赤くし、唇をわなわなとふるわせ始めた。

「も……もしかして私に○○させたり○○に○○○○
○を出し入れたりピーをピーしたりピーしたりピーして、自分の
子供を孕ませるつもりなの!？」

絶望したかの様な表情を浮かべるグラトニー。

「どこでそんな知識を手に入れたんだ」

呆れてものも言えないな、言ってるけど。

「イヤよ絶対嫌！貴方みたいな鬼畜野郎に処女膜破られるくらいだったら死んだ方がましだわ！！」

こいつ・・・・・・・・物言いがストレートすぎる。

グラトニーは全力で逃げようと布団を跳ね上げベッドから飛び出した。

「あ！おい、ちよつとまで」

ちよ、おまつ

「キャアアアアアアア」

鼓膜が破かれんばかりの悲鳴どうもありがとう。

案の定予想していた通りになった。

グラトニーは慌てて布団を被り直して、頭だけのぞかせた。

「わ・・・・・・・・私裸じゃないの！服は？服をどこへやったのよ」

治療する際に邪魔な衣服は全てはぎ取ってしまった。

元々、布切れになっていてほとんど服としての機能を果たしていなかったし。

不可抗力というやつである。

決して幼女の体を眺めて欲情したりはしていない。

決してしていない。

これは大事なことなので二度言いました。

「悪いな、服は邪魔だったんで全部剥ぎ取らせてもらった」

グラトニーの赤かった顔が今度は蒼白になった。

「ももももももしかして事後？事後なの？私の処女膜は既に破られて貴方の汚い○○○が私の大事な○○○に叩きつけられて、もう妊娠してるのね、そうなんでしょう！？」

「お前、ちょっと落ち着け、常識的に考えてお前のその未発達な体に欲情するような男がいると思ってるのか？だとしたらそれは大きな間違いだ、俺はどちらかと言えば巨乳でお姉さんな人が好みだからな、お前はまるで正反対、つまり対象外なんだ、分かるか？」
それを聞いたグラトニーは一気に真顔に戻った。

「それで？貴方は私をどうするつもりなの」

さっきとは打って変わって冷静な口調になった。

「切り替えはえーなおい」

こいつの処遇に関しては寝ている間にずっと考えていた。

この歳でPKなんて、ましてや七つの大罪の一人であるなど尋常ではない。

幼い頃からろくな生活を送ってきてはいないだろう。

俺も、幼い頃は親を知らずに路地裏で盗みを働いて暮らしていた。

それでも、教会に拾われてやっと温かい暮らしを送ることができた。

とても短い間だったが。

そんな俺に出来る事はなんだろうか。

そう思った時に俺はグラトニーを奴隷という建前で従わせることを思いついたのだ。

いや、これは後付けの理由にすぎないのだが……………。

「お前には、オールツール学園へ通ってもらおうと思う」

グラトニーは驚いたように目をまるくした。

「私が？学園？なんの冗談なのかしら、全く笑えないわ……………」

「俺は大マジだ」

「ふざけるな！私はレッドネームプレイヤーで七つの大罪で人殺し

なんだぞ！そんな奴がどうして学園なんて行けると思うんだ、無理に決まってる」

「俺だって通えてる、お前に無理なはずがないだろ」

「貴方みたいなぬるま湯に浸かったような奴に私の何がわかるっていうの！私はPKなのよ！貴方はPKKなんですよレッドネームの気持ちなんか分かるはずがないわ……分かるはずがない」

「PKだってPKKだって人殺しという点では同類だろ、どこが違う」

「貴方馬鹿なの……罪のない人を殺してきたPKと罪を犯したPKを断罪するPKKどちらが正義かなんてはつきりしてる、どっちが正しいかなんてはつきりしてる！」

「正義か正義じゃないかなんて関係ない！俺はPKが憎かったから殺してきたんだ、私怨だよ、俺とお前にほとんど違いはない、お前はまだ間に合う気がするんだ、普通の生活に戻る、そんな気がするんだ」

「騙されないわ！私はレッドネームなのよ、人ごみに紛れこんだって一発でPKだって分かるのよ、人並みに生活できるはずがない」

俺はニヤリと口をゆがめる。

「それはどうかな、自分の名前をタゲってみろよ」

「何をいって……な！？私の名前が赤色じゃなくなってる」

「俺は初代の絶望の深淵を殺した時にこの能力を手に入れた、俺に負けた者はレッドネームから一般ネームに戻るパッシブスキルをな、そして誓った、ある一人のPKを除いて、もう誰もPKを殺さない、それから俺は俺に負けたPKには全てその首輪をつけて普通の生活をするように約束させている」

「偽善だわ」

確かに偽善かもしれない、PKKの俺がPKに対してこんなことをすればそう思われても仕方ない、だが、そんなことを恐れていた俺は、いや俺達は前に進むことができない、PKを倒すことだけがPKKじゃない、少なくとも今はそう思っている。

「そんなこと言ってたらこの世の全てが偽善さ、PKとしての罪はこれから償えばいい、俺ができる範囲でフォローもする、迷ったり悩んだらとりあえず一歩踏み出せ、受け売りだけどな、どうだグラトニー俺と一緒にこないか」

グラトニーは布団を握り締めうつむいたまま黙り込んだ。

そのまま沈黙が数分間続いただろうか。

辺りはすっかり暗くなり窓からは綺麗な満月の月光が静かに降り注いでいた。

彼女は何かを決心したように、顔を上げ何かを呟いた。

「私の……名前……グラトニーじゃ……..
ないから」

「なんだって？」

声が小さくてよく聞き取れなかった。

俺がそう言うとな彼女は肩を震わせて顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「私の真名！グラトニーじゃないからっ」

「そっか・・・・・・・・それじゃあなんて呼べばいいかな」

「アイナ・・・・・・・・アイナ・シュタイン」

その時の真っ赤になったアイナのあまりの可愛らしさにSSを密かにとっていたことは、俺だけの秘密だ。

真名（後書き）

会話がぶっ飛んできたのは気にしないでください。
今後どんどん飛んでくるかもしれません

アイナ・シュタインの場合

私、アイナ・シュタインの朝は早い。

いつものように私は、朝早くに目を覚ました。

ベッドで仰向けになったまま、私の自宅にあるものとは違う天井を見つめる。

私が住んでいた七つの大罪の本部であるギルティギルドでは、豪華なシャンデリアがあり天蓋付きのベッドに世話係も居たものだったが、今日は違う。

私の眼前に広がっているのは、ベリパーという巨大樹の内部の年輪の一部だ。

このベリパーという樹は、大体高さ120メートル横幅が60メートルほどまで大きくなる巨大樹だが、ナクスが住んでいるというこの樹はその中でも特別に大きいのではないかと思う。

昨日、ナクスに聞いた話ではナクスは戦闘スキル以外にもさまざまなスキルを取得しており、木材加工スキルや空間把握スキルを駆使してこのベリパー内部に一人で巨大な居住空間を造ったらしい。

全く馬鹿なのか、天才なのか。

そこが彼の取り柄なのかも……しれないけど。

とりあえず、私は昨日からナクスの居候もとい奴隷になっている。

ゆっくりと首に繋がれた首輪をなぞってみる。

冷たい皮の感触。

私は気分を変えるために両腕を精いっぱい伸ばしてから布団を畳んでベッドから抜け出す。

樹の内部にいるというのに窓がしっかりとついていてそこから朝日が差し込んでいる。

ここは、ナクスから与えられた私の部屋。

さすがに一緒に部屋ではまずいというナクスの提案で、まだ使われていない部屋をもらった。

他にもこの巨大樹の居住空間には、多くの使っていない部屋が存在するらしくナクス自身も全部を把握しきれていないらしい。

私の部屋はナクスの部屋の向かい側にある。

洗面所とトイレはナクスと私の部屋の間に伸びる廊下を真っすぐ行けば、すぐに見つける事が出来た。

そこで、ふと肌寒さを感じ改めて自分がナクスから渡された男もののワイシャツ一枚しか着ていないことに気づく。

私のような年頃の乙女に男物のワイシャツなんて渡すなんてあの男の無神経さにはあきれるばかりだわ。

洗面所で歯ブラシを見つけ、歯磨き粉をつけて、シャコシャコと歯を磨く。

思えば、こんなに穏やかな朝は久しぶりだ。

いつもならこの時間には、私は七つの大罪のうんざりするほど長い会合に出席し、会合が終われば、ギルティギルドの反対勢力を潰しに各地に派遣されたりしていた。

たった一日で、私の置かれている立場がこんなにも変化している。

アイナはそのことに妙な感慨を抱きつつも、一応ナクスには感謝していた。

P Kは好きだった。

相手を殺す瞬間だけが、自分の生を感じることができた。

幼い頃からP Kは生活の一部となり、私という存在の大半を占めていた。

P Kは自己肯定の手段であり、同時に私の価値だった。

私は、殺すことで渴きを癒し飢えをしのぐことができた。

それ以外の手段は知らなかった。

あの悪夢の吹き溜まりのようなあの街で私が見つけた唯一の真実。

あそこでは、毎日誰かが殺し殺されまた殺し、相手の命を啜ること

でしか生きることができない。

だから殺した。

私も最初は、そんなこと望んでいなかった。

だがそれも、わずかな食料のために友人が目の前に引き裂かれた、あの日までだ。

いつしか私は、グラトニーというPK称号を手に入れ、同じようなPKが集まるというギルティギルドに誘われ、七つの大罪の一員となった。

私はそこでやっと平穏を手に入れたのだと思った。

やっと人を殺さなくても生きていける場所が出来たのだと、私はPKに喜びを感じるのと共に埋めることの出来ない虚無感を感じていた、だからもう人殺しをしなくて済む平穏な生活が欲しかった。

けれど、そこで待っていたのは更なる殺戮、七つの大罪は私が思っているほど甘くはなかった。

いつしか私は、殺戮の快楽に溺れ、自分を見失っていた。

そして、ナクスに負けた。

純粋な死の恐怖は私の自我を覚醒させた。

寄生虫に体を蝕まれ、今まで生きてきた短い人生が走馬灯のように頭の中を掻き廻ったのに、色んな人をPKしてきたのに、最後に浮

かんだのは殺された友人の笑顔だった。

もう誰も殺したくない。

でも死にたくない。

私が生きている限り誰かが死ぬ。

止めることのできない負の連鎖。

それを全て断ち切ってくれたのがナクスだった。

私は彼を過大評価しすぎている。

自分でもそう思っではいるが、彼がいなければ今の私はあり得ない。

そう思うと彼に感謝せずにはいらないのだ。

「お前・・・・・・・・泣いてるのか」

突然後ろから声をかけられて、肩がビクッとあがってしまった。

慌てて手で涙を拭う。

「なんでもない・・・・・・・・バカ」

私は急いで口をすすぎ、ナクスの前から逃げた。

どうして・・・・・・・・こんなに・・・・・・・・涙が止まらないのかな。

アイナ・シュタインの場合（後書き）

紅の新刊と電波的な彼女の新聞はまだですか・・・・・・・・・・。
ずっとまわっているというのにつなげだあああああああ
冬に放送予定のアニメはなかなか期待できるものがない・・・・・・・・。

ここは、グレイセスfでもやるしかありませんね。

主人公がまんまコードギアスのスザクなんですが、ギアスのスザクはどうしても好きになれなかった・・・・・・・・。

アビスの主人公も最初は嫌いでしたが、後半は自虐的なところが結構好きでした。

PVを見たところだとおもしろそうなので買ってみたいです。

それとニコニコで見た秘奥義を見たところ、背中で語る教官がイケメンすぎたw

あのキャラがいるだけで買う価値がありそうです

ナクスの場合2において絶望の深淵がPKKという所について若干の補足を加えました。

ナクスの場合3において紅陽の胸が小さいのに大きくなっていた不具合を修正しました

異変

「一つ質問なんだけど、いいかしら」

ナクスは、頷く。

「結局私は貴方のことをなんて呼べばいいのかしら」

「そんなものどうとでも呼んでくれて構わないが、アイナの好きなように」

ナクスの自宅からオールツール学園へと向かう途中の通学路には、まだ誰の姿も見えない。

オールツール特有の四角い住宅が数メートル間隔で点在している。ナクスの家からオールツール学園は、オールツール街を一本の中央道路で繋がっている。

命中Ⅱ視力のステータスさえ高ければ燦然とそびえる学園の建物が確認できるだろう。

「それじゃあ……ご主人様とかマスターとか呼んだ方がいいのかしら、私一応奴隷なんですよ」

アイナの言葉に足がもつれそうになり立ち止まる。

「お前は何をいってるんだ!？」

アイナの何を考えているのか分からない無表情が俺に向けられる。

「何かおかしいこといったかしら」

内心の動揺を隠すように俺は必死だった。

「当たり前だろ、ご主人様なんてまずい、まずすぎる」

「そうかしら」

「そうに決まってる」

「じゃあお兄ちゃんとか」

アイナはニヤニヤと笑いながら俺に問う。

「だだだだために決まってるだろうがっ」

「どう呼べばいいのよ……」

アイナは俺の隣を歩きながら、たちまち不機嫌そうになる。

「ナクスでいいだろ」

「つまんない」

すかさず突っ込まれる。

相変わらず何を考えているのか分からない顔でこちらへじっと見つめる。

俺のほうが背が高いので自然見上げる形になっている。

段々とめんどくさくなってくる。

「それ以外で頼む……」

「わかった」

ぷいっと前を向き、そのまま歩いていってしまふ。

いつの間にか校門の前で来ていた俺達はそのまま学園内へと入る。

ちょうど登校してくる生徒が少ない朝早くにきているので、オールトールの装飾華美な校門の周りは静かな空気に包まれていた。

校門をくぐり、すぐ傍に立っていた掲示板に目を通す。

ギルドの勧誘、モンスター討伐依頼、学園での噂、PKの情報やレアモンスターの出現場所など様々だ。

PKの情報に一通り目を通し、特に七つの大罪に関する書き込みがなかったので安堵する。

これから本格的に七つの大罪狙われることになるだろう。

アイナのこともある。

学園にまで手を出すことはないと思うが、警戒するにこしたことはない。

「何をじっと見ているの」

「ほれ、掲示板のPK欄」

「なるほどね、私に関するは見つかったかしら」

「特にはないな」

「そんなにすぐに七つの大罪を動かないと思うわ」

「その根拠は？」

「七つの大罪を中心にしたギルド『ギルティ』は別に構成員が七人しかいないわけではないわ、一人一人が自分直属の部下をもってい

て一枚岩というわけでもないのよ、派閥争いも絶えないし大きくなりすぎるといいうのも考えものね」

「組織というものは、いつもそうだな」

俺が答えると、アイナは黙り込み、静寂が流れた。

掲示板を後にし校舎の中へと入る。微細な違和感を感じる。朝の学園はこんなにも静かだったろうか。

改めて辺りを見回すが人っ子一人いない。

いくら俺達が朝早くに学園を訪れたからといっても、静かすぎる。

「ナクスッ上！」

上階から気配。そして破壊音。

俺はアイナを抱えて廊下から玄関へと跳躍。一瞬遅れて上階の天井が破壊され、何かが姿を現す。

「モンスター！？」

俺は驚嘆の声をあげる。

ノンエンカウントエリア
戦闘外区域であるはずの学園にモンスターが現れるというのは通常ではありえない。

あまりにも静かすぎる街、誰もいない学園、そしてこのモンスターどう考えても尋常ではない。

たった一日で何が起こったというのか。

全長5メートルはあろうかという蜘蛛のような形状をしたモンスターは、こちらへと跳躍。

空中で目の一つからフォトンレーザーを放つ。

俺とアイナは左右へと回避。空中へと手をかざし武器を取りだす。

アイナはグラトニーを構え黒々とした蜘蛛へ振りかざす。

俺は、全長2メートル半はある大太刀（八咫鳥）を装備。

刀技系階位一位スキル『真空牙剣』を発動。大太刀が神速で袈裟斬りに振り下ろされ目に見えるほどの空気の刃を生み出す。

蜘蛛型のモンスターは、アイナのグラトニーを6本あるうちの2本の足で防ぎ、練成系階位二位のスキル『迎豪壁』を発動。

空間に歪みを作り出し真空の刃を掻き消す。

俺は、デュレイスペルとして詠唱しておいた魔法系階位三位スキル『激曝慧陣』を発動。

蜘蛛型のモンスターの周りに幾層にも描かれた魔方陣が出現。

一斉に槍型の魔法砲弾が形成、合計20もの魔方陣から一斉に放たれる。

魔法砲弾が蜘蛛型モンスターの体を貫通、硬い筋肉で装甲された皮膚を強引に引き裂き、腕を引きちぎり無数の目を切断した。

肉塊へと変わり果てた蜘蛛型モンスターはその場に崩れ落ちる。

オーバーキルをしたことによるドロップ品が勝手に俺のアイテム欄へと加えられた。

「街でモンスターに出会うなんて、何かのアトラクションか」

「そんなアトラクションがあったら私は、その立案者を殺してるところだわ」

「同感」

俺は、グラトニーを構えなおすアイナを確認する。

予想通り、ダンジョンで見る時と同じように攻撃可能カーソルの黄色マークが出現した。

「どうやら、学園内全体が一種のダンジョンとなっているようだ」

「やはりPKごときに平穏な日常は送れないってことかしら」

アイナは悲しそうに原型を留めていない蜘蛛型のモンスターを見た。

俺は、何も言葉が出なかった。

掛ける言葉が無かったわけではない。ただ今俺が何をいってもそれは陳腐な同情の言葉にしかない。

今はこの異変を解決するほうが先決だ。

「敵が何体いるのか分からない、できるだけ固まって行動したほうがよさそうだ」

フォトンレーザーと魔法スキルでただの横穴となった玄関から校舎へと戻る。

挨拶

「あら、その武器私をいたぶった時の武器じゃないのね」

アイナが俺の装備した武器を指差して言う。

「そう言うなよ・・・あの時はお前が相手だったから仕方なかったんだ、出し惜しみすれば負けるのは俺だったからな」

アイナと俺は壊れた階段から2階へと上がる。

この学園は学園国家でもあるオールツールの中でも一番の所要人数を誇っているの、その生徒の数も計りしれない。

当然、校舎の大きさも半端な大きさではない。

「あのモンスター5階から廊下到大穴空けながら落ちてきたのか」
蜘蛛型のモンスターが開けた穴を見上げればちょうど5階の辺りで穴が止まっている。

「それで、どうするのナクス」

「まずは他の生徒がいなかったかを確認する、敵の数がどれだけか把握できていない今、迂闊に動くのは危険だ、誰かと合流できればいいんだが」

アイナが頷き質問を変える。

「分かった、それよりナクスってどれぐらいの種類とレベルのスキルが使えるのかしら？さっき使っていた『ストライ・シー激曝彗陣』って剣舞士みブリーダーたいな近接職じゃ使えない魔法スペルよね」

俺はステータス画面を開き、自分が使えるスキルとスペルを眺める。
どんどん下へスクロールして確認する。

スキルと言っても様々な種類がある。

取得すれば常時発動しているパッシブスキル。スキルからスキルへと繋げて発動する派生スキル。

特定の条件下のみで発動することができる儀式スキル。

それと同様に魔法スペルが存在している。

普段はスキルとスペルはそれほど分けて呼ばれることは少ない。

そして、スキルにもスペルにもレベルが存在し1～20段階に分か
れている。

ただしレベルがそのまま強さを表しているわけではない。

高レベルのスキルでも燃費が悪かったり特殊な効果を付与したりと
様々な種類に分かれている。

もちろんレベルが高いほうが威力が高いスキルも多い。

要は使いようだ。

「俺が使える最高レベルは17だなスキルの種類は多すぎて数え切
れない」

アイナの呆れた顔が見える。

「貴方どれだけ馬鹿なのかしら？スキルの種類が数え切れないほど
多いのに最高レベルが17階位だなんて聞いたことないわ、私だっ
てせいぜい13階位が限界なのよ」

「まあ・・・俺も色々あってな」

「話たくないのなら聞かないわ」

4階に上がってから異変は加速した。

そこには闇が広がっていた。

何も無い闇。

「なんなのこれ・・・」

アイナが俺の隣で呟く。

俺にも全く事態が把握できていない。

いや、前にもこんなことがあったような。遠い昔・・・どこ
かで。

「ナクスあれって・・・」

アイナが闇の中を指差す。

目を凝らしアイナが指差す方角を見る。

赤い・・・魔方阵？

このゲームで赤が意味することと言えば・・・。

「やばい、アイナすぐにここを出るぞ」

俺はアイナを引っ張り強引に玄関から飛び出す。

「ちょちょいいきなりなんなのよ、いきなり走り出したりして」

「あの赤い魔方阵は、PKにしか使えない召喚魔方阵だ、元々召喚魔方阵っていうのは転移魔法の上位互換みたいなもので、高位の魔法使い（ウィザード）しか使えない魔法スキルだが、あの魔方阵はその中でも特別な位置づけにある」

ナクスは高速移動をしながら口を動かし続ける。

「あれは、対象をプレイヤーに設定して召喚することができる唯一の召喚スキルなんだよ、つまり俺達が今いるここは本来のオールトールじゃないってことだ」

アイナも納得がいったようだ。

顔が青ざめている。

「それって……」

俺は樂觀しすぎていたのだろう。

相手は、予想以上の速さで俺達に迫っていたのだ。

オールトール学園の門を飛び出し、人のいない道を駆け抜け抜けアイナと俺はエクルセル広場へとたどり着いた。

俺達を召喚した魔方阵があったということは、どこかに出口である青い魔方阵が存在しているはず。

しかし、さっきから探知システムのスキルを使っても一向に見つけることができない。

「やあやつと来ましたね、まちくたびれましたよここまで大規模な召喚魔方阵を使ったのは君が始めてだよ光栄に思っただけだね」

俺とアイナは突然の声に体が硬直する。

ナクスはエクルセル公園のシンボルとも言える通信塔の上に人影を見つけた。

円形に並ぶ6本の通信塔に6人の影。

俺に恨みがあるPKは多いだろうが、これほどの力を備えていると

は予想外だ。

「七つの大罪」

隣でアイナが震える。それは恐れからなのか……それとも
おそらく最初の声を掛けてきた男がリーダーなのだろう。

「キヤーナクスサーン」

6人のうちの一人の女と思わしきシルエットがかん高い声を上げた。
「見て見て！本物のナクス様じゃん本物のPKKのナクス様が目の
前にいるわーなんてかわいらしいお姿なのかしら、ねーねースロー
スまだ殺しちゃだめなの？早く殺したいわ皆もそう思ってるはずよ」

「我慢してくださいよラストさん、今日は挨拶に来ただけなんです
から。僕もこんな有名人に会えて久しぶりにうずうずしているのを
我慢しているんですよ」

スロースと呼ばれた男が答えた。

「挨拶とは別にもう一つ用事があるんです」

スロースの視線がアイナへと向く。

「ナクスさんの隣にいるポンコツはもういりません、もういらな
いので、代わりに君が入りませんか」

「入ると思うのか」

「思ってますんもちろん」

それでも俺に聞いたのには何か理由があるのか。

それともただの気まぐれか。

「それじゃあ僕らはもう帰りますんで、こう見えても色々忙しい
んですよ本当に今日は挨拶に来ただけなんですよ」

そう言ってスロースが指を鳴らす。

出口用の魔方陣が出現。

結局スロースを含めた6人は何もせずに帰っていった。

「対人召喚魔法まで使って何もしてこないとはな……」
アイナも納得がいかない様子だ。

「絶対おかしいわ、こんなのあるりゃない何もしてこないなんて・・・
・・・何か裏があるんじゃないかしら」

「とりあえずここを出よう」

アイナと俺は魔方阵をくぐる。

転移魔法で白くなる意識の中で俺は一瞬。

ソレを見た。

無事に転移が完了し元の公園へと降り立つ。

今度はちゃんと他にも人がいる。

俺はフラフラと2、3歩よろめいてひざまづいた。

「どうしたのナクス」アイナが心配そうに俺の顔を覗き込む。

アイナが伸ばしてくれた腕を借りて立ち上がる。

確かに俺は見た。

何かを見た。

だが、それが何だったのか俺は認識できていない。

まるでモザイクがかかったようにぼやけている。

「ナクス、ナクス」

アイナにひっぱられて正気にかえる。

「悪い、学園に遅れちまうな走るぞ」

「うん」

しばらくその何かは俺の脳裏に焼きつき離れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0480j/>

N.N.N.

2011年3月9日16時54分発行